届け 世界の果てまでも

令和２年１０月　２日
No．３６
文責　校長　飯久保一男

新任教職員の紹介

齊藤（さいとう） みなみ 先生

１０月より，５年１組半田先生の代替教員として５年生の学習指導に当たります。

10月より，また，タイトルをマイナーチェンジしました。…黄金の国ジパング

親心のはずが…

「**這（は）えば立て，立てば歩めの親心**」ということわざがあります。これは子どもの成長を楽しみにする親の気持ちを表す言葉ですが，この言葉は，親による「欲」や過度な「期待」をはらんでいるような気がしています。子どもが産まれる前は，無事に産まれてほしい，産まれてからは，健康に育ってほしいと，願ってきたと思います。私も産まれてきてくれたことを，純粋に喜び，存在してくれているだけで，うれしかったことを覚えています。ところが，子どもが成長するにつれて，親の「欲」や「期待」が生まれてくるのです。

我が子に，つらい思いはさせたくない，幸せな人生を送ってほしいと願うのは「親心」です。その「親心」から，運動ができたほうがいいと幼児期からスイミングスクールやバレエ教室に通わせたり，小学校に入ってから苦労しないようにと幼児教室で勉強させたり…となる場合があります。こうした親の願いや働きかけは，「子どものため」という前提があるため，誰にもケチのつけようがありません。しかし，「子どものため」という「親心」であるがため，行き過ぎてしまう場合もあるのです。そして，「子どものため」といいながら，実は，自分の不安の解消や自己満足のために，子どもに無理なことを要求している場合も少なからずあるのです。

こんな事例を考えてみてください…。

息子がサッカーをやりたいと言い出しました。父親も母親も大賛成で，早速，情報を集め，父親も母親も気に入ったサッカーのクラブチームに入れました。毎週土曜日，朝６時からの練習には，父親が早起きして，車で送り，練習にもつきあいました。母親も水筒の準備をし，お弁当の支度に精を出しました。ところが，練習に参加し始めて１カ月ほどたった土曜日の朝，息子がなかなか起きてきません。練習に行きたくないと言い出しました。頭が痛いと言います。熱はありません。そこで，父親が息子を怒ってしまうのです…。「なんだ，たいしたことないじゃないか。父さんだって疲れているのに，お前がサッカーやりたいって言うからつきあってやっているんだぞ！ しっかりしろよ！」

これだけでは原因はわかりませんし，辛くてもがんばることを教えることも必要だと思います。しかし，もし，限界までがんばっているのに，このまま続けさせるとしたら，親がガマンを強いることになります。

親に限らず，人間は，相手のためによかれと思ってやっているのにうまくいかないと，腹が立つようにできています。一生懸命努力してきたつもりの親ほど怒りは激しくなります。こうした親の叱咤激励に対して，「なにくそ！」と踏ん張って乗り越えたり，やめたいことをはっきり親に伝えられたりする子は，それほどダメージを受けないのかもしれません。しかし，真面目で責任感の強い子どもほど，親の意向をくみとり，ガマンにガマンを重ねてしまうのです。

「イヤだけど，イヤとは言えない」「やめたいけど，やめると言ったら親ががっかりする」など，心の中での言葉にできない葛藤が大きくなり自分では抱えきれなくなると，身体症状に現れたり，精神的な症状に現れたりするようになります。

子どもの身体症状や言動に何らかのいつもと違う感じを受けたのならば，それは，子どもからの助けを求めるメッセージの可能性があります。気づいたときに「ＳＯＳなのかも」と考えてみてください。言動を振り返ってみると「親心」という名の押しつけになっていたり，親の「欲」であったり「世間体」であったりすることもあるものなのです。

小さなハーモニー

今までも何度か「やめたい」とは言っていたらしい。
しかしその翌週には「やっぱり楽しいからやる」とも。
娘のピアノ。まあいわば，習い事に対する子どもの定番的反応だろう。

ところが妻によれば「今度はかなり本格的」で，
先週はついにダダをこねて休んでしまったとのこと。
どうやら２カ月先の発表会で演奏予定の曲がうまく進んでいないらしいのだ。
「ちょっと聞かせてよ」
「やだ」
「前，とても上手だったよ」
「やだ，もう弾かない。発表しない」

仕方なく娘の座らぬピアノ椅子に腰かけて，その曲の譜面をたどってみた。
ポロリ，ポロリ。
何を隠そう，私も子ども時分にほんの少し習っていたのだ。
お，割といけるかな…，などと思ったのが大間違い。
結局その２分足らずの小曲をものにするため（しかも相当たどたどしく）に，
日曜日の午後をすべて費やすハメになったのだ。

夕食前，つっかえつっかえの演奏を披露した。
妻のお世辞をよそに，娘は感想の一つもない。
「パパでもできるんだから」と言うつもりだったが，逆効果だったかな…。

ところがさにあらず。
練習に夢中で気づかなかったが，娘は鍵盤と格闘する私の様子を時折じっと見ていたらしい。
娘が寝る前に言いにきた。
「パパ，今度のお休みの日にピアノ教えてあげるね」

花王「暮らし百景」より

息子たちが小さいころ，ヤツらは，妻と風呂に入るのを嫌がって，私と風呂に入りたがりました。
私は息子たちに自分で洗わせました。見ていて，洗えていないところは注文を付けていました。
ところが，妻は自分で洗ったのではきれいにできないと「親心」でゴシゴシやったのです。
おかげで，家に帰ったら，まず一杯やりたいのに，先に風呂に入る日課になりました。
まあ，風呂上がりのビールも，これまた，うまいのですが…。